

年間第 19 主日
マタイ 14・22-33

2014.8.9 18:30 ミサ
柴田 潔(イエズス会司祭)

平和について

平和旬間に当たり、今日は福音箇所から離れて平和について考えます。
(サマーキャンプに参加した子どもたちへの質問)「愛と勇気がお友だちの正義の味方は誰ですか?」「そう、答えはアンパンマンです。」 平和とアンパンマンの作者やなせたかしさんが今日のテーマです。

やなせさんの人生を振り返ります。

やなせさんが5才の時にお父さんが亡くなりました。2歳年下の弟が先に養子に行きました。小学2年生になった時、お母さんに連れられて小児科をしているおじさんの家に来ました。すると、「たかしはしばらくここにいるのよ。病気があるからおじさんに治してもらいなさい」とお母さんに言われ、離れ離れになります。ぼくは体が弱いからよくなるまでおじさんの家にいるんだ、よくなったらまたお母さんと一緒に暮らせるんだ、と信じました。でも、「あなたのお母さんは悪い人や。こんなかわいい子どもを捨てて再婚するなんて」という声を周りから聞きました。だんだんと、自分はだまされた、お母さんから捨てられた、という悲しみに襲われます。

苦勞して入った千葉大学のデザイン科を卒業するとすぐ、1941年に兵隊に取られました。21歳で戦争に行った時、「天に代わりて不義を討つ」という軍歌がありました。「この戦争は聖戦だ」と勇ましく歌う歌です。ぼくも兵隊になったとき、日本は中国を助けなくてはいけない、正義のために戦うんだ、と思って戦争に行きました。でも、中国からしたら日本は侵略してくる悪魔にしか見えません。

兵隊の生活は大変でした。いつ敵に見つかるか分からない恐怖、自分も人殺さなければいけないかもしれない不安にさいなまれました。泥の中をはいずりまわらなくてはいけないし、毎日訓練もします。重たい大砲を運ぶ役目だったので毎日へとへとになりました。それ以外に辛い訓練があつて毎日殴られました。でも、それにも耐えられました。耐えられないのは何かというと、食べる物がないということでした。けがをしても薬を付けたら治る。でも、ひもじいことには耐えられません。追い詰められた人には、何でも食べ物に見えてくる。

人間でも食べたくなくなってしまふ。だから、漂流した人が飢えたときに死んだ人を食べた話を聞いても納得できる。自分が飢える体験をしてみて、飢えがどれほど辛いかわかりました。

日本が戦争に負けて、日本の社会はがらっと変わりました。それまでの軍国主義から民主主義に変わりました。それまで天皇が神様だと言っていたのに、急に平等だ、民主主義だと言われるようになりました。みんな民主主義が何なのか分からなくて右往左往していました。でも、だんだんはつきりしてきたことがあります。正義のための戦いなんてどこにもないんです。正義とは、相手をやっつければいい、そんな簡単なものじゃない。

戦争が終わってしばらくすると、「正義の味方」というヒーローがたくさん出ました。スーパーマンや、スパイダーマン・・・どんどん人気が出た。でも、彼らは、飢えた人を助けに行くとかそういうことは全然しない。悪い奴をやっつけると正義が勝ったということになる。悪い怪獣をやっつけると世界は平和になったということになる。でも、飢えた子どもには何もしないんです。だから、自分のことだけをアピールするコマーシャルみたい。

どこかで戦争が起きると、戦争している国は、両方とも正義の戦争だという。戦って勝って正義を見せようという。でも、子どもたちのことは見てない。だから、戦争になると子どもたちが次々に死んでいますよね。だから、ぼくは、何かをやるなら、まず飢えた子どもを助けることが大事だ、と思った。それが戦争をして体験して感じて一番大事なことでした。

国が掲げる正義は、ある日突然逆転するんです。一方、逆転しない正義は、献身と愛です。例えば、もしも目の前で飢えている人がいれば、一切れのパンを差し出すこと。戦争から戻った後、ずっとそのことを考えてました。そこから、アンパンマンが生まれました。自分の顔をお腹のすいた子どもに与える。献身と愛の姿です。それも、アンパンを配るんじゃないで、アンパンの方から飛んでくるんです。

私は、アンパンマンは、ただのアニメではないことに気がつきました。やなせさんは、アンパンマンをモデルに「本当の正義」を描きました。自分が痛んでも人を助けることが「平和の王道」だ、と教えてくれます。イエスの教えと同じです。また、字がまだ読めない子どもたちが「本物の正義」を見抜いてアンパンマンが大好きになっていきます。大人の私たちも、愛と献身で平和を厚くしていきましょう。自分から出かけて、困っている人を助け起こすアンパンマンに倣っていきましょう。平和の使者になっていきましょう。